

Kindai Hospital Today

vol. 11

病院長 ご挨拶

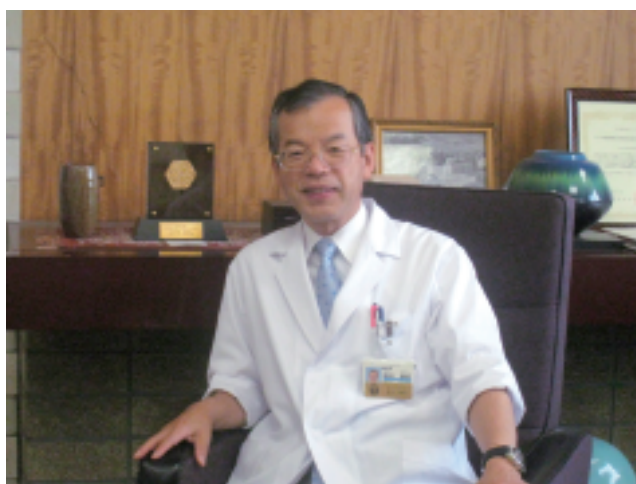
最高の医療と、それを支える医の心！

病院長 富田 勝郎

誰にとっても病気に見舞われることは恐怖であり、人生にとって最大の危機であることに、今も昔も変わりはありません。「なんとしても病いを乗り越え健康を取り戻したい」と願って最高最善の医療に救いを求めるのは、ごく自然な心の流れでしょう。そのような期待に応えるには、洗練された“最高の医療技術”と長年にわたる“豊富な経験”の蓄積、それを支える“医の心”が不可欠です。私たち金沢大学附属病院のスタッフは、このような最高最善の医療を、愛情と使命感を持って実践しています。

金沢大学病院は、江戸時代の加賀藩の種痘所開設(1862年)を皮切りに、今日の姿に至るまでの長い歴史の中で常に、最先端の医療を実践してきました。その姿は今日、石川・富山・福井3県にまたがる北陸医療圏の隅々に至るまで、絶大な信頼を得てきていることに示されています。

金沢大学病院は、社会に対して確固たる“使命”を担っており、それゆえに「特定機能病院」に指定されています。その



病院長室にて

使命を果たすため、豊富な経験をもつ約2300人余のスタッフ（医師620人、看護師750人、コ・メディカル230人及び事務職員等の病院関係者）により専門診療科31科、7:1看護体制のもと、最新医学を真っ先に取り入れながら、最善の医療を追求し続けています。その姿は通常の医療から高度な検査、難度の高い手術、高度先進医療に至るまで随所に見てとれます。金沢大学病院は本年12月、外来診療棟新営工事の竣工（来年5月オープン予定）をもって、平成10年から着工した再整備計画は終了し、新スタートに向けて希望と頼もしさに満ちています。

もちろん金沢大学病院は石川県のみならず北陸全体の“医療の要”として大きく貢献してきました。しかも現在の社会は交通網も情報網も高度に発達した高速アクセス時代であり、北陸医療圏における金沢大学病院の重要性は一層高まっています。当大学病院はこれらの県市町の公立、私立病院のみならず、開業医・クリニックに至るまで、あらゆる医療機関と密接に連携・協力しながら、北陸の患者さんがベストの医療を享受できるよう努力し続けています。

さらに金沢大学病院で新しい知識とレベルの高い技術の研修を受けた若き医師達が、各地域の病院に赴任してからも、大学病院と緊密な連携を保ちながら、最善の医療を実践することができるよう指導しています。

これからも金沢大学病院は「医は仁術」に始まる思いやりの精神のもとで、最高の医学的知識と技術を駆使して、最善の治療を施す」という、理想的な医療を追求し続けます。私たちは患者さんにとって“最も頼りがいのある存在”であり、“最後の砦”ともなる救いの場であり続けたい、そのために“大学病院の使命”に誇りをもって、時流に惑わされることなく本来の医療を推進できるよう努力していきたい、と願っています。

ご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。



病院幹部のご紹介

理事紹介



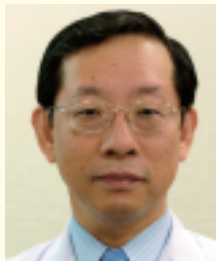
病院担当理事
古川 隼

第二期中期計画の策定と病院の経営改善へ向けて

病院担当理事就任にあたり、抱負を述べます。私に与えられた最大の課題は、第二期中期計画に向けて中村新学長のビジョンに基づいた実現のためのアクションプランを作成する事です。すなわち、第二期中期計画では、金沢大学附属病院を中心とする宝町・鶴間キャンパスを「北陸圏医療ゾーンの中核」とし、北陸の行政と医療機関との連携を密にし、先端医療の開発、医療人養成、安全で安心な医療の提供などのリーダー的役割を果たすように到達目標を作成し計画する事であり

ます。このためには、院内にあっては、教職員のモチベーション維持のために、二期目の富田病院長が計画している医師の処遇改善を早期に実現し、更なる経営改善への努力や、2台目PET-CT・サイクロترونなどを整備した先端医療開発センター(仮称)設立など、ハード面の充実を図ることも欠かせません。その他、地域医療対策、先端臨床医学教育研究棟の実現化など当面する諸問題に懸命に取り組む所存です。

副病院長紹介



経営管理担当
山本 健

無駄な出費を抑えることが、職員の処遇改善につながります

古川隼理事の後任として、経営管理担当副病院長を務めることになりました。職員各位のご努力によって、平成19年度の当病院収支は黒字を計上することができました。然しながら平成20、21年度は国への借金の返済(債務償還経費)がもっとも重くなる年度であり、本年春の保険点数改定が病院経営に与える影響にも未知の部分が残っています。私に課せられた当面の課題は、以下の点にあると考えています。(1) 大学附属病院の機能を維持しつつ、無駄な支出を抑えて病院経営を健全に保つこと。特に薬剤と高額な消耗品の見直しを行うこと。(2) 放射線部、救急部・集中治療部、検査部、麻酔部をはじめとする中央診療部門の実績を

評価すること。中央診療部門は診療科に横断的な貢献をしています。その稼働額は各診療科に計上され、実績を表わす適切な指標がありません。中央診療部門の貢献を正當に評価することは、そこで働く職員のモチベーションを一層高めることにつながると期待します。

(3) 病院の予算によって医師の処遇改善を図るといふ病院長の方針は、職員各位の努力が現場に還元されるという点で、従来の大学附属病院にはない英断です。これは、病院経営が黒字であって初めて可能になります。

以上の諸点を実現するためには、医療職・事務職各位のご協力が必須です。よろしくお願い申し上げます。



診療担当
太田 哲生

“患者中心の医療”を提供するために、病院スタッフ一丸となってがんばりましょう！

私は、この度二期目の病院長をお務めになれる富田先生から、副病院長として主に診療部門を担当するように命ぜられました。折しも、この4月からは“金沢大学医学部附属病院”から“金沢大学附属病院”と病院の名称が改められ、さらには本年12月までには新外来診療棟が完成し、まさに病院が新しく生まれ変わる年です。ところで、近年医療を取り巻く環境は大変厳しいものがあり、財政優先の医療改革が経済性や効率性を優

先させる余り、本来の“患者中心の医療”が十分に行えないような危機的状況に置かれていくのではないかと、私自身大変危惧しております。今後、医療の経済性や効率性が求められるなかでも、日常診療におきましては、できるだけ“患者中心の医療”が損なわれることのないように、そして常に安心・安全で確実な医療が提供できるように、病院スタッフの皆様方と力をあわせて頑張っていきたいと思っております。何卒、よろしくお願いいたします。



臨床教育・研究担当
松井 修

困難な問題が山積していますが、ともに頑張りましょう

この度、教育担当副病院長を命ぜられました。過去4年間2期にわたり診療担当副病院長を務めてきましたが、その中で行ってきた外来診療棟準備、病院内役割分担ワーキング、診療支援部ワーキングなどは継続したままで、教育を担当します。教育についてはなによりも先ず、研修医教育の改善とそれとともに研修医増が重要な課題ですが、山岸教授のもとで改善傾向が見えており、引き続き山岸教授をサポートしながら進めていきたいと思いま

す。教育・研究は大学病院の重要な使命ですがその多くは診療の中で行われるものであり、大学病院が抱える様々な問題とも連動させながら考えていきたいと思えます。金沢大学病院は疲弊する北陸の医療を支えるのみならず、我が国全体の医療にも貢献しなければなりません。困難な問題が山積していますが各自が自身の問題としてとらえ努力することが必要かと思えます。ともに頑張りましょう。



人事・労務担当
中尾 眞二

「金大病院を離れたくない」と医師が感じられるような労働環境作りをお手伝いします

前執行部に引き続き副院長として人事・労務を担当することになりました。過去2年間、執行部という中枢から病院を眺める機会に恵まれ、様々な勉強をさせていただきました。その間にもっとも強く感じたことは、金沢大学附属病院がいかに医師やコ・メディカルスタッフの献身的な勤務によって支えられているかということです。勤務医の病院離れが社会問題になりつつある現在、本院の素晴らし

さを保ち、さらに発展させるためには医師を始めとする職員の処遇改善が不可欠です。幸いなことに病院長の強力なサポートと事務職員の方の努力により、2008年7月から医師の処遇改善に向けて本院は大きな一歩を踏み出すことになりました。今後より良い処遇改善を目指すためには現場の声を執行部に届ける必要があります。皆様のご意見をお待ちしています。



安全管理対策担当
濱田潤一郎

彼を知り、おのれを知れば百戦危うからず

この度、安全管理対策の担当を仰せつかりました濱田です。激動の時代と人間の探求から生まれた兵法哲学「武経七書」のなかに、「孫子曰く、兵は国の大事、死生の地、存亡の道、察せざるべからず。」で始まる最も有名な「孫子」があります。孫子という言葉は聞き慣れなくても「彼を知り、おのれを知れば百戦危うからず」という命題はご存知の方が多いと思えます。この孫子のなかで「百戦百勝は善の善なるものにあらず、戦わずして人の兵を屈するは善の善なるものなり。」という一文があります。現代語訳しますと、「百回戦って

百回勝ったとしても、それは最上の勝利ではない。戦わずして相手を屈服させることこそ、最上の勝利なのである。」ということになります。彼もしくは相手を医療事故に置き換えて読んでみると、医療安全もまさしくこの通りだと思えます。孫子の本質は、戦いもまた人間の営みならば、人間をよく知る者こそが、勝利するということなので、「人間の営みと安全」ということを念頭において医療安全に取り組みたいと思えます。皆様のご支援をお願いいたします。



広報・地域医療連携担当
並木 幹夫

「Live locally, Grow globally 地域に生き世界に羽ばたけ !!」

この度、広報・地域医療連携担当副院長を拝命いたしました。現在、医師不足に端を発した「医療崩壊」が問題視されています。この北陸地域も例外ではなく、この難題を切り開くのは今まで北陸地域の医療を中心として支えてきた金沢大学附属病院しかありません。しかし、この現状を打開するためには金沢大学附属病院のみでは困難ですので、地域の病院・医院との連携が重要になってきます。平成20年度から始まった地域医療計画では「がん」「脳卒中」「心筋梗塞」「糖尿病」の

4疾病ごとの地域連携ネットワークの構築がうたわれています。地域医療連携担当として、この問題に取り組んでまいりますので、ご協力をお願いいたします。もうひとつの担当である広報部門は金沢大学附属病院の皆様の素晴らしいお仕事を国内外に発信することが任務です。皆様方からの情報のご提供をお願いいたします。

「Live locally, Grow globally 地域に生き世界に羽ばたけ」を合言葉に、金沢大学附属病院を発展させましょう !!



薬剤担当
宮本 謙一

薬をとおして療養、医療安全、病院経営に貢献します

本院にかかっている患者様のうち薬を投与されていない方はほとんどいないと思います。薬は病気の治療に不可欠です。それ故、薬の安全管理及び適正使用が重要なのです。薬は病気の治療のためには大変ありがたいものですが、使用頻度が高いためにちょっと間違っていると医療事故のもとになりかねません。事実、院内でのインシデント（ヒヤリ・ハット）報

告の半数近くが薬に関わる事例です。また、使用方法を誤ると副作用がでるのも薬です。さらに、直接診療経費（消耗品費）の半分近くを占めるのも薬です。健全な病院経営のためには薬の無駄遣いを出来るだけ避ける必要があります。薬の安全管理・適正使用のため、なんでも薬剤師に聞いてください。また、薬剤師の提言には耳を傾けてください。



看護担当
小藤 幹恵

良いことを1つ、心にしみこませる1日、を積み重ねていけますように

この4月に改めて、看護担当の副院長を拝命し、身の引き締まる思いを新たにしております。大学病院の大切な役割を果たしていけるよう看護をとおして努めて参りたいと存じます。まずは、この春、例年になく多くの新人を迎えた新たな看護チームが、順調に育まれていくようにしたいと思います。その1つである昨年設置の「たまご・ひよこサロン」や「メディカルスキルアップセンター」は現在、看護師育成を支える交流の場として、未来への光が感じられるような明るさを醸し出しています。

また、ライフワークバランスのあり方や本年度導入の育児短時間制度、自己啓発休業制度、

設置予定の病児保育室の利用を含め、様々な働き方が可能になりつつあることをエネルギーにして、安全で質の高いハートフルな看護の充実を進めていきたいと思っております。

そして、病棟、中央診療棟に続いて、いよいよ次年度に予定されている新外来診療棟オープンに向けて患者さんや看護の視点から具体的な準備をしていきたいと思っております。

日頃の皆様のご支援に感謝申し上げます。今後、一層親しまれ役立つことができるよう努力していきたいと思っております。どうぞよろしくお願い申し上げます。



事務担当
伊藤 健一

病院長のリーダーシップの下、問題・課題の解決を

この度、副病院長として、事務部門を担当することになりました。

任期期間の20~21年度は第一期中期目標・中期計画の完成時期であり、また、第二期中期目標・中期計画の策定時期でもあり非常に大切な時期であります。

経営改善係数2%の達成、診療報酬改定△0.82%への対応及び総人件費5年で△5%への対応等々の問題が多くあります。

また、先端医療開発センター（仮称）の設置、高次人間ドックの実施及び地域医療機関との連携強化等々課題も山積しています。

病院長の強いリーダーシップの下、事務部門として病院長が意志決定するための適切なデータの提供に最大限の努力をして参りますのでご協力の程よろしくお願いたします。

●●●●● 薬学部臨床講座（臨床薬物情報学）が新たに発足しました ●●●●●

平成18年から薬剤師教育の制度が変わり、医師教育と同じ6年制になったことをご存知でしょうか。その目的は薬剤師として臨床に係わる実践的な能力を培うことを目標とされています。ですから、今まで以上に附属病院での実習が重要視されています。現在も大学院医療薬学専攻の修士の（薬剤師免許を持っている）学生が附属病院で実習を行っていますが、22年度から1年を通じて薬剤師をめざす学生（薬剤師免許を持っていない）が入れ替わり立ち代わり、実習をさせて頂くこととなります。いろいろご迷惑をおかけすると思いますがよろしくお願いたします。この薬学部6年制になった

ことに伴う大きな変化の1つに実習を円滑に進めるため実務家教員が増員することが認められ、昨年10月から新しい研究室（臨床薬物情報学研究室と称しています）が発足したことです。教授、石崎純子准教授、菅幸生助教が配置しています。さらに、今までと違うのはこの3人の教員は教育研究を行うばかりでなく、薬剤部の実務にも携わることです。このような臨床講座が発足したことは薬学部にとっては初めてのことです。3人の教員は教育研究と実務を両立させ、よりよい教育研究ができるように努力しています。今後ともよろしくお願いたします。（荒井國三）

●●●●● 肝臓外科のさらなる進歩を目指して（肝臓・移植グループのご紹介） ●●●●●

肝臓グループは、チーフの谷を中心に5名のスタッフが主に肝細胞癌や転移性肝癌の外科的治療に当たっています。当科の肝臓手術の歴史は古く、1960年台に故本庄一夫教授が当時最先端であった広範肝切除を行ったことに遡ります。以来多くの諸先輩方の努力により、肝臓外科の手術手技は年々進歩してきましたが、近年の移植医療の発展に伴いその治療成績は飛躍的に向上しており、当科でも谷が生体部分肝移植手術のバイオニアである京都大学移植外科へ研修に赴き、最先端の肝臓手術手技を導入しました。1999年に先代の三輪教授の下、生体部分肝移植手術の第一例目が施

行されて以来、本年5月までに50例を数えます（うち最近の2例は血液型不適合移植）。2004年1月から肝細胞癌合併例に対する移植手術が保険適応となり、2007年6月には治療歴のある肝細胞癌症例にも適応が拡大され、これまでは諦めるしかなかった末期的な病態の患者様への福音となりましたが、更に周術期管理の進歩により、現在では血液型不適合移植が従来の血液型適合移植と遜色無い成績となり、益々生体部分肝移植に対するニーズが高まっています。私共は一人でも多くの患者様を救う為、更に治療成績を向上させるべく日々努力を重ねて行きたいと考えております。

受賞・表彰

- 文部科学大臣表彰 科学技術賞（開発部門）
整形外科 土屋 弘行・富田 勝郎
平成20年4月15日
- 第13回日本炎症・再生医学会奨励賞
血液浄化療法部 坂井 宣彦
平成19年8月2日

- 日本腎臓学会 大島賞
血液浄化療法部 古市 賢吾
平成20年5月30日
- 第4回十全医学会賞
神経内科 高橋 和也
平成19年12月19日

- 石川県臨床衛生検査技師会
学術奨励賞
検査部 表 美香
平成19年5月26日

初期臨床研修「大学日本一」を目指して

卒後臨床研修センター長 山岸 正和

初期臨床研修が義務化され3年目の平成18年4月より、研修センター長の大役を仰せつかっております。その年、金沢大学での初期臨床研修採用者は、定員40名に対して15名と大きく減少し、まさに危機的状況に陥りました。これは、本学での研修プログラムが、指導医と研修医の「心の触れ合い」に欠けていたこと、及び、「研修医自身が将来の方向性を目指す」プログラムでなかったことなどが大きな要因であろうと推定されました。そこで、次年度からは、これまでと違う新しい方向を示すこととしました。その結果、明らかに研修医志望者の反応が異なってくるようになり、以来、より満足の高い初期臨床研修プログラムの実践に努めて参りました。あっという間に2年が経過しましたが、この間初期臨床研修に対する取り組みの大切さを痛切に感じながら、充実した1年を過ごさせて頂きました。医学生、研修医の諸君を始め、ご尽力いただきました関係各位にお礼申し上げます。

さて、一昨年、昨年は「これまでと違う新しい方向を示す」ことから、新しい取り組みを始めました。平成21年度はこの基本的精神に加えて、プライマリ・ケア研修に重点をおいた新しいプログラムの実践を試みます。具体的には、大

学病院研修中における2ヶ月間の福井県立病院救急部でのプライマリ・ケア研修、大学病院における救急診療の大幅な改革などが挙げられます。各科の専門医による研修医セミナーや実技指導中心の研修医ワークショップなど、大学病院でしか取り組めないような教育システムは継続していきます。医学教育で名高いTierney先生（カルフォルニア大学サンフランシスコ校）をお招きして開催したセミナーなども予定しておりますし、更に研修医の先生方の希望を最大限に考慮しながら絶えずより良いプログラムへと進化させて参る決意です。

初期臨床研修とともに、各科専門医養成を念頭においた専門医研修の充実が重要な課題です。卒後臨床研修センターでは2007年8月より、専門医臨床研修についても、プログラムの編成や実践について取り扱うこととなり、まさに金沢大学附属病院におけます卒後臨床研修の中核になるうとしています。組織の活性化の維持には若い力が必須です。若い力を結集できる、日本一の大学研修プログラムを目指し、卒後臨床研修センタースタッフ一同邁進するつもりであります。



金沢セミナー参加 (H20.4.20)



研修医セミナー「初期の外科縫合」(H20.5.17)

研修医紹介



加藤 貴士

桜の花も散り新緑の頃となりました。期待に満ちた医師としての人生が始まりましたが、常に思うことは自らの知識不足です。学生の頃とは違い、患者さんに対して様々なことを考慮しそれに対し勉強する必要があります。診断のために必要な情報、考えるべき鑑別疾患、行う検査の意義、治療選択をする上での情報、どのように疾患をfollowしていくかetc、医師として必要な知識の深さに改めて驚かされている毎日です。

そのような研修生活を送る上で指導医の先生方には大変お世話になり、また感謝しております。医師としての判断、必要な診察や検査、治療法など最先端の知識を教えていただけるだけではなく、これからの人生に最も必要となる「医師としての勉強方法」を示してくれます。

金沢大学の研修医制度は毎年改善されており、現在も充実した研修生活が送れています。同期の研修医たちと知識を共有しながら医師としての基礎をしっかりと身に付けたいと思います。これからも宜しくお願いします。



本藤 有智

研修が始まって約2ヶ月が経ちました。方向音痴の私も、ようやく院内の構造がつかめるようになり、研修内容も軌道に乗ってきました。

大学病院で研修するメリットは、一言でいうと“厚い指導体制”だと思います。教授から学生まで、医学を通じて幅広く接することができ、大先輩の方々からは優れた医学知識と経験を、後輩からは純粋な情熱を学ぶことができます。また、カンファレンスを通じて、一人の患者さんに多くの医師の目が通され、一つ一つのプロブレムに対して、綿密な検討がなされるのも大学病院ならではの長所ではないかと思っています。更に、大学は研究と臨床の接点でもあり、最先端の医療情報にも触れる機会が多いです。各科横断的な勉強会も盛んに行われています。

2ヶ月はアツという間でした。この調子でいけば2年間もアツという間と思います。各科での新たな出会いを楽しみに、少しでも多くのことを吸収していきたいと思っています。



友影 美貴

金沢大学附属病院での研修が始まり1ヶ月が過ぎてしまいました。実際に働き始めて感じた事は自分の至らない点ばかりです。どうしたらよいのだろうと戸惑い、あせり、もどかしい日々を送っています。お世話になっている指導医の先生、上級医の先生方、看護師の方々には本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

こんな私が、1ヶ月で学んだことは、当たり前ですが患者さんは本当に不安でいっぱいということ。初めての検査をし、これから先のことを考え、悩みは尽きることがありません。そんなとき手を握ること、そしてそばに居ることの大切さも学びました。医師として不安でいっぱいの患者さんの役に立てるようになるためには、私はもっともっと勉強し経験を積まなくてはなりません。いつか一人前の医師となってたくさんの人の役に立てるよう、1日1日頑張っていきたいと思っています。

看護部からのお知らせ

■ 金沢大学病院メディカルスキルアップセンター開設 ■

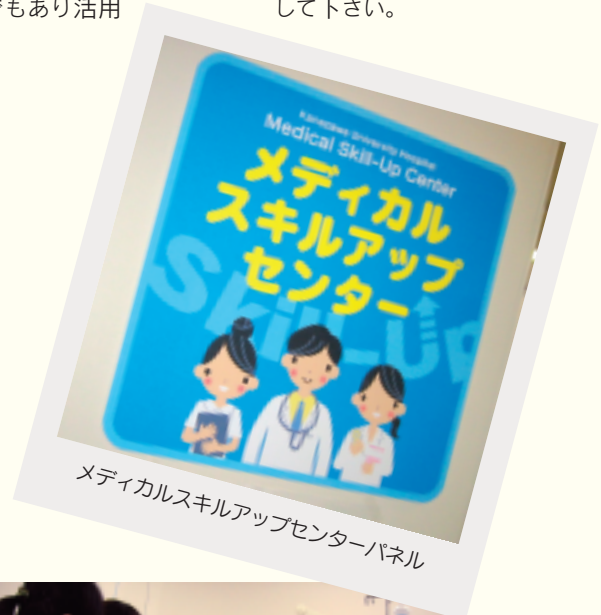
平成19年11月に金沢大学病院メディカルスキルアップセンターが、医師や看護師、その他の病院職員・学生の診療技術支援を目的に東病棟1階に設置されました。

採血や静脈注射用の模擬腕、臨床現場に必要な呼吸音や心臓音を聴取する各種シミュレーターが設置され、指導用視聴覚教材を含め医療者がスキルアップできるための器材が揃えられています。

看護部では新規採用者への技術研修や指導者研修に活用、また各部署からはプリセプターや先輩看護師とともに、体位変換や浣腸など患者へ安全で確実な看護を提供するために多くの新卒者が利用を開始しています。

毎日（土日を除く）午前9時から午後3時まで開場され、誰でも技術や手技習得のため気軽に

に立ち寄ることができます。楽しく学べる施設でもあり活用して下さい。



メディカルスキルアップセンター内部



看護技術指導をうける新人看護師

■ 静脈注射バッジについて ■



静脈注射スタンダードレベル認定バッジ

看護師が静脈注射を実施するにあたり、医師・薬剤師と協力して2年間教育研修を続けてきました。静脈注射認定テストに合格した看護師がこのバッジをつけます。院内実施にむけて準備をしています。



■ ふれあい看護体験 ■

5月11日～5月17日まで看護週間でした。当院でも5月13日と5月17日にふれあい看護体験、ふれあい看護・親子を実施しました。

5月13日に高校生ら3名が看護を体験しました。医療現場は怖いというイメージだったようですが、車椅子を押したり、血圧を測ったりする中で患者さんに「ありがとう」と声をかけられることで「うれしい・楽しい」と感じてもらえたようです。また、5月17日のふれあい看護・親子には小学生と母親の親子2組の参加がありました。病棟では、新生児の抱き方・おむつ交換・授乳・沐浴の見学や体験をしました。参加した小学生は「やわらかい髪、軽い、あたたかい」「赤ちゃんがかわいかった。看護師になりたいと思った」などの感想がありました。



■ 新ユニフォーム誕生 ■



前回のユニフォーム更新、平成12年度から8年間使用してきた愛着のあるユニフォームを、7対1看護体制導入を契機により優れた素材を用い現代風に少し手を加えました。

全体的にスマートに見え、襟元の校章に加え、袖にも病院名を今回はシルバーグレイであしらいました。また、ジャケット予防衣は7色のパステルカラーから選ばれるようにしてあります。新しいユニフォームで、多くのフレッシュナースたちと良い看護をしていきたいと思っています。



■ がん高度先進治療センター ■

(Kanazawa University Hospital Cancer Center)

センター長 矢野 聖二

がん高度先進治療センターは、金沢大学がん研究所の腫瘍内科および腫瘍外科の医師がスタッフとして配置し、金沢大学附属病院から外来化学療法室を同センター内に配置することでできた新しいセンターであり、私が着任した平成19年4月から本格的に活動を開始しました。

がん高度先進治療センターは、肺がん、膵がん、原発不明がんなど難治性の固形がんを対象に診断および薬物療法を中心とした診療（入院および外来）を行っています。その一方で、がん診療連携拠点病院の中核として、各診療科、中央診療施設、薬剤部、看護部、経営企画部、病院部と協力しながら、がん診療連携拠点病院事業の運営も担当しています。

がん高度先進治療センターは、それぞれのスタッフががん医療の司令塔とも言うべき臨床腫瘍医としての研鑽を深め、金沢大学附属病院とがん研究所の橋渡的存在として分子標的治療による難治がんの克服を目指したトランスレーショナルリサーチ（基礎研究と臨床を橋渡しする研究）も展開します。一方では、がん医療の専門資格（例えば日本臨床腫瘍学会専門医や日本がん治療認定医機構のがん治療認定医）の取得が可能なカリキュラムで研修を行い、がんの早期診断から集学的治療、さらには終末期医療を体系的に捉え、「病気のみならず人を診る」ことのできる臨床腫瘍医およびコメディカルの育成を目指します。

まだまだ立ち上がったばかりの新しいセンターですが、これからもご指導・ご鞭撻を賜りますようお願いいたします。

◇ 診療について ◇

がん高度先進治療センターは、肺がん、膵がん、原発不明がんなどを対象に診断及び薬物療法を中心とした治療を行っています。

外来：外来棟2階にあります。がん患者さんを診察するセンターの特性を考慮し、防音性にとんだ診察室で、患者さんのプライバシーに配慮した診察を行っています。

病棟：東病棟10階に15床のベッドを有し、入院での診療を行っています。毎週火曜日にケースカンファレンスと回診を行っています。また、定期的に看護師との勉強会を行っています。

◇ 治療内容 ◇

肺がんについて：組織型、臨床病期、全身状態を総合的に評価し、標準的な化学療法、放射線療法、放射線化学療法、および分子標的治療を行っています。分子標的治療に関しては、上皮成長因子受容体チロシンキナーゼ阻害薬であるイレツサやタルセバの感受性を予測するため、腫瘍の上皮成長因子受容体遺伝子変異も積極的に測定し、治療方針決定の参考にしています。また、世界に先駆けた試みとして分子標的治療の耐性因子の測定や、抗がん剤の耐性因子の測定も行い、治療方針決定に役立てる予定です。

膵がんについて：組織型、臨床病期、全身状態を総合的に評価し、標準的な治療を行っています。また、放射線を併用した放射線化学療法や、臨床試験としてゲムシタピンとティーエスワンを併用する治療もを行っています。

原発不明がんについて：転移や腫瘍マーカーのパターンなどから原発巣を推定し、カルボプラチンとドセタキセルの併用化学療法や必要に応じ放射線治療を併用した集学的治療を行っています。



外 来



病 棟

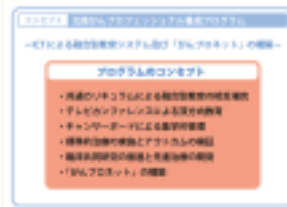
■ 「北陸がんプロフェッショナル養成プログラム」がスタートしました ■

統括コーディネーター 並木 幹夫
(金沢大学医学系研究科がん医科学専攻長)

「北陸がんプロフェッショナル養成プログラム」がスタートし、受講生を募集しています。このプログラムが始まった背景として、「がん対策基本法」が平成19年度から施行されたことがあります。この法律では、がん医療の均てん化の促進、つまり、どの地域でも、質の高いがん医療がうけられるようなシステムの構築がうたわれています。具体的には、がん医療を担う高度な専門家の養成と施設の整備および一般住民へのがんに関する情報を提供する体制の整備です。この目的を達成するための優れた取り組みに対して文部科学省が財政支援を行っており、私達の取り組みも採択されました。

「北陸がんプロフェッショナル養成プログラム」には6つのコンセプトが掲げられています(表)。

このプログラムの大きな目的の一つ



(表)



(図)

は、がんの専門家(プロ)を養成することですから、大学院生からベテランの先生まで、どなたでも学習できるように、一流の先生方をお願いして優れた教材を作成いたしました。その教材を、受講希望の方にインターネットで配信しています。また、医師のみならず、看護師さん、薬剤師さん、放射線技師さん、臨床検査技師さんも学習していただくことが可能で、皆様のキャリア形成にお役に立つものと思います。まずは(<http://www.gan-pro.com> または<http://www.がんプロ.com>)へアクセスしてみましょう(図)!!

■ NST稼働施設認定 ■

当院では医師、看護師、薬剤師、臨床検査技師、栄養士でチームを組み、低栄養の患者様を支援しております。当院は、そのチームが活動しているNST(栄養サポートチーム)稼働施設としての認定を更新しました。また、栄養サポートチーム専門療法士の資格取得のための実習生の受け入れも随時行っております。HPも作成し、NST活動をさらに発展していきます。

<http://www.teamdiet.jp/nst/>

「Food Holick~Team DiETの管理栄養士がおすすめする food&nutrition information♪~」
NPO法人Team DiETのHP内に栄養管理部のブログ「Food Holick」を掲載しています。金沢の料理研究家とコラボし、おいしい&簡単なレシピの情報を発信しています。最近ではコレステロールゼロのオイルやパルサミコ酢を用いて、自宅で本格的なイタリア料理を楽しめるレシピを公開しています。

さらに、食材や栄養価など栄養士ならではの視点でコメントもしておりますので是非ご覧下さい。<http://blog.goo.ne.jp/tkohno-knz>

「丈夫がいいね、脱メタボ講座:体脂肪を減らすために加えるものとは?!」

北國新聞の脱メタボ講座に栄養管理部主任八幡のインタビュー記事が掲載されました。減らすより、加えてみませんか?野菜を増やす(満腹感を高める)、ドレッシングにはレモン汁や酢を加える(ドレッシングの量を減らす・うまみが増す)、噛む回数を増やす(満腹感が高まる)、一緒に食べる人を増やす(時間をかけて食べる)という加える発想を紹介しています。さらに、ランチョンマットを用いて、マットに乗り切らない分は多すぎと食事の適量が分かるオリジナルの方法も紹介しています。(Team DiETメソッドより)

「じわもんを取り入れた給食メニュー開発」
調理師と栄養士で、金時草や太胡瓜などの加賀野菜を使った給食メニューを考え、北陸農政局主催の「給食メニューコンテスト」に応募しました。メニューは、枝豆ご飯・ねじらかれいの煮物(ねじらかれい、つる豆)・ラタトゥイユ(金時草、赤栗かぼちゃ)・太胡瓜の酢の物(太胡瓜)・ブドウです。じわもんを使用した季節感あふれる料理で、北陸農政局のHPに紹介されました。<http://www.maff.go.jp/hokuriku/safe/balance/documents/kyusyoku020.pdf>

■ 地域医療連携室からのお知らせ ■ 【がん相談支援室】のご案内

本院では、「がん」の相談や今後の治療など、患者さんやご家族の様々な不安や悩みに対応させていただくため、がん相談支援室を設けました。

ご相談は、看護師長と医療ソーシャルワーカーが対応させていただきます。ご相談内容によって、医師や専門看護師等と連携して、各種情報提供サービスを行っています。

◇ ご相談方法 ◇

面談と電話で対応させていただいています。他の方と面談中の場合もあります。

ゆっくりとお話を伺いたいので、あらかじめ相談希望日時を直接ご連絡くださるか、医師、看護師にお申し出ください。

ご相談は無料です。相談内容に関するプライバシーは厳守いたします。

◇ 対応時間 ◇

平日 午前8:30～午後5:00

*土・日・祝日はお休みです。

◇ お問い合わせ先 ◇

地域医療連携室

電話：076-265-2040

■ 寄附制度のご案内 ■

本院は総合病院として、また特定機能病院として、患者さまに人間性を重視した質の高い医療を提供するとともに、将来の医療を担う医療従事者の育成と臨床医学発展のための研究開発や地域医療への貢献に努めております。このような活動を支えるしくみの1つとして、本院には寄附制度がございます。いただいた寄附金は金沢大学附属病院の診療用機器や研究開発設備の充実をはじめ、さまざまな目的に活用させていただいています。ご賛同いただける場合は、担当までお声を掛けていただければ幸いです。

◇ お申込方法について ◇

寄附の申込は、下記の担当窓口までご相談下さい。本制度のご説明及び必要書類をご用意させていただきます。なお、ご寄附に当たりまして、病院全体への寄附や研究目的の寄附など用途をご指定いただくことができます。

◇ お問い合わせ先 ◇

経営管理課産学連携係

電話：076-265-2090

◇ 寄附者に対する税制上の優遇措置について ◇

大学に対する寄附金については、法人税法及び所得税法に基づき税制上の優遇措置があります。

☆寄附者が法人の場合は、法人税法上の「全額損金算入」を認められる指定寄附金として財務大臣から指定されています。

☆寄附者が個人の場合は、所得税法上の「寄附金控除」の対象となる特定寄附金として、年間の総所得金額の40%を限度に、寄附金額から5,000円を差し引いた金額が所得から控除されます。

(注) この優遇措置を受けるためには、確定申告に際して大学が発行した領収書が必要になります。

編集・発行 金沢大学附属病院（事務担当 総務課調査・広報係）
TEL 076-265-2936 FAX 076-234-4320
皆さまからのおたより、ご意見をお待ちしております。